

わたしの「AI観」

人生観、死生観、恋愛観……。人により思い描くものは違うでしょう。「AI観」という言葉の響きから何を思うのか。作家・九段理江氏のインタビューに続き、AIを活用する工芸職人、自治体、食品メーカー、野球部監督を取材しました。



01

作家

人間とAIの違いの一つは、欲求の有無。
少なくとも私には、表現したいという欲がある

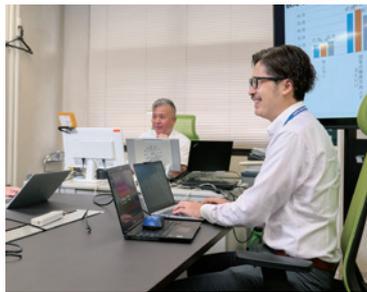
作家 九段理江さん

02

工芸職人

非合理の塊のようなものが人間。
だからこそ対極にあるAIとも共存するべき

南部鉄器職人 田山貴紘さん



03

自治体

人間の水準がAIによって底上げされ、
さらなる高みを目指せる世の中に

横須賀市 経営企画部
デジタル・ガバメント推進室 室長 太田耕平さん

04

食品メーカー

AIは人間のポテンシャルを
引き出してくれるツール

有限会社仲松ミート 執行役員 総務・経理統括部長 仲本和美さん



05

野球部監督

AIは、人の気持ちまでは察せない。
だから最後は、選手の直観に委ねた

品川翔英中学校・高校 教諭・野球部監督 石田 寛先生



01

作家

人間とAIの違いの一つは、欲求の有無。 少なくとも私には、表現したいという欲がある

作家 九段理江さん

——都心に建設中の、これまでにない刑務所“シンパシータワートーキョー”を描いた『東京都同情塔』が、2024年1月、第170回芥川賞を受賞しました。登場人物と生成AIとの会話がキーとなる小説ですが、記者会見での、「全体の5%くらい生成AIの文章を使っている」という発言が話題となりました。

これほど注目されるとは思っていませんでした。誤解を招く言い方をしてしまいましたが、ChatGPTの文章をそのまま使ったのは、一文のみ。作中に登場する生成AIに主人公が発した問いに対する長々とした回答の冒頭一文だけなんです。

ただ、作品をつくるうえで、「こういう人物が登場したら読者はどう感じます

取材・文／堀水潤一 写真／平山 諭

くだん・りえ●1990年生まれ。2021年『悪い音楽』で第126回文学界新人賞を受賞しデビュー。同年発表の『Schoolgirl』が第166回芥川龍之介賞、第35回三島由紀夫賞候補に。2023年『しをかくうま』で第45回野間文芸新人賞受賞。2024年1月、『東京都同情塔』で第170回芥川龍之介賞受賞。



か?」などアドバイスを受けて、編集者との打合せに際して思考の整理に使ったりなど、体感的には5%くらいは活用していたため、咄嗟にそう答えてしまったんです。よく「炎上狙いだったんでしょう?」と聞かれますが、天然の発言でした。

私は、小学校低学年でパソコンのタッチタイピングができるなど、新しいテクノロジーにいち早く触れられる環境で育ちました。三島や太宰が好きな文学少女でしたが、デジタルに対してネガティブな感情はなく、生成AIも道具として自然に使っていただけです。そうした感覚のまま、無邪気に答えてしまったことがギャップを際立たせたのだと思います。

いずれにしろ、大きく報道されたことで、幅広い層に私の小説が届いたことは嬉しく思います。ただ、報道の見出しだけを読んだ若い子に、「生成AIを使えば小説が書けるんだ」と誤解させてしまったとしたら申し訳ありません。簡潔に真意を伝えることの難しさを実感しました。

別れ際、編集者からのひと言が執筆のきっかけ

——そもそも、生成AIをテーマにした、この小説を執筆するきっかけは何だったのでしょうか?

出版社の編集者Sさんと会食した際、建築の話題になりました。会うのは2回目でしたが、刑務所という建物をテーマに書きたいと思っていたこともあり、話が弾みました。ただ別れ際、Sさんから言われた「原稿、よろしくお願ひします。今日はそれだけ言いに来ました」という言葉が心にひっかかってしまったんです。いかにも編集者が作家と交わす事務的な会話で、「あれっ、楽しい時間だったのは私だけで、Sさんはそうではなかったのかな」って。そこで帰宅後、ChatGPTに言葉の真意を尋ねたところ、「強い熱意や緊迫性を感じます」という答えが返ってきました。それで気持ちの整理がついたんです。客観的に見てそうならば、余計なことを考えず、そのまま受け止めて原稿に取り組もうとポジティブになれました。それが『東京都同情塔』を書くきっかけでした。

生成AIをテーマにしようと思ったのは、言葉について深く考えてみたかったからです。というのも、ChatGPTに「現代的な価値観で刑務所をアップデートしたいです。どういう名称が考えられますか?」と質問したところ、「リカバリーセンター」とか“セカンドチャンスセンター”などのカタカナ語がずらり。軽薄な言葉

が、瞬時にいくつも並んだことに違和感を覚えました。でも、考えてみれば、当たり障りのない会話では普通にカタカナ語は出てくるわけで、今の時代感覚と合っている気もして。そうしたことを小説で表現したら面白くなるんじゃないかと思ったことがきっかけです。

主人公の話す言葉が作者自身、つまらなく感じた

——作中、生成AIが発する言葉に対して、登場人物が「AIには己の弱さに向き合う強さがない。無傷で言葉を盗むことに慣れきって、その無知を疑いもせず恥じもしない」など、強い表現で批判します。九段さんの意見も投影されていますか？

近いことを思うことはありますが、そこまで批判的ではありません。そもそも私はテクノロジーに抵抗感をもっていない。むしろ、「AIは人間の能力の限界を乗り越えるために使うもの」くらいに捉えています。ですから本作でも、生成AIを悪者に描くつもりはありませんでした。

ただ、書き進めていくうち、主人公が話す言葉がつまらないものになっていくことを、作者である私自身、感じるがありました。なかでも後半、主人公の沙羅がプレゼンする場面では、彼女の話す言葉が生成AIそっくりで、恋人の拓人同様、とても空虚に感じてしまったんです。思うに、彼女のプレゼンは、誰からも批判がこないよう模範的な言葉を選んで使っていたからなんですよ。

そう考えたとき、人間とAIの違いは、いろいろあると思いますが、一つは、欲求の有無だと思います。少なくとも私は、人から何を言われようが、伝えたい、表現したいという欲求があって小説を書いていますし、人間は、今より良くなりたいたいか、人とわかり合いたいたといった何かしらの欲求に突き動かされて発展してきたのだと思います。

その欲求を感じるためには肉体が必要です。一般に知性とは、頭脳を指し

感情や情動があるが故に争いも生じる。
テクノロジーはその限界をも乗り越える

ていると思われませんが、私は、身体を通さなければわからない知性もあると思っています。例えば、どういう文章を心地良く感じるかっていうのもそう。この小説には大事な場面で、肌がどうか毛穴がどうか身体的な描写が多数出てきます。AIに代表される無機質なものと、生身の人間にしかない身体的なものを同居させたかったんです。

人はテクノロジーによって冷静さをも保てるのでは

——そういう意味では、九段さんはAIと人間を二項対立で捉えていませんよね。先ほど「AIは人間の能力の限界を乗り越えるために使うもの」と発言されましたが、限界の先の人間の具体的なイメージがあれば教えてください。

改めて聞かれると難しいですが、そうですね。今、欲求や肉体の話をしたばかりですが、人間には感情や情動があるが故に、頭ではコントロールできないことも多々生じると思うんです。それが争いの種になる。

自分の挫折経験も関係していると思いますが、私が小説を書く究極の目的は、人とコミュニケーションをとりたいからなんです。私が中学生のとき両親が離婚しました。あのとき、互いがもう少しだけ冷静になることができれば良かったのではとか、私がうまく働きかければ良かったのではとか、今でもよく考えます。

感情をコントロールしたり、自分とは異なる立場にいる人の気持ちを考えたりって、簡単ではありませんが、そこにAIをはじめとする技術的なサポートがあれば、少しは冷静さを保つことができるのではないかな。争いも少しずつ解決につなげることができるのではないかな。そんな世界をイメージしてみました。

その人との固有の関係性や時間の積み重ねを大切に

——ありがとうございました。最後、高校生に伝えたいことがあれば。

前作が芥川賞候補にならず落ち込んでいた時期、ChatGPTに「小説が売れないけど、書き続ける意味ってありますか?」「小説家って素晴らしい職業ですよ?」と愚痴ったところ、「素晴らしい職業です!」と返され励みになりました。単純ですよ。誰でも言えそうな言葉ですが、膨大なデータからChatGPTが抽出した人間の平均的な回答だと思うと、前向きに捉えることができました。



『東京都同情塔』

九段理江 著 (新潮社)

ザハ案の国立競技場が完成したもう一つの日本。寛容論が浸透するなか新しい刑務所が建てられることに。犯罪者に寛容にできない主人公は仕事と信条の乖離に苦悩しつつ未来を追求する。



第170回芥川賞・直木賞受賞式にて。写真提供／文藝春秋

ただ、何回かそうした使い方をしているうち、やはり違うなと思うようになりました。なぜかと考えてみると、人と人との関係性から発せられた言葉ではないからです。AIの回答は、合理的で平均的かもしれないけれど、私だけに向けた言葉ではありません。その点、人間同士の会話は、その人との固有の関係性や、時間の積み重ねのなかで育まれます。

冒頭の、編集者Sさんのエピソードも、その後、信頼関係を築いたことで、互いの気持ちを知ることができました。Sさん曰く「あのとき九段さんは、芥川賞候補に入らず落ち込んでいたため、これからも書き続けてほしいと伝えたい。その一心から出た言葉だったんです」って。編集者が作家と交わす事務的な会話などではなく、心の通った温かい言葉でした。こうした会話ができるのが人間なのだと思います。なので高校生には、生身の人間と対話を重ねながら、その人とはしか結べない関係性を築いてほしいと伝えたいです。

とはいえ、人との関係を避けたい時期もあるでしょう。私も中学3年生のとき転校先でなじめず不登校を経験しました。その期間が無駄だったかといえば、好きな読書がたくさんできたし、自分と向き合うこともできました。孤独な時間が自分を育ててくれたとも思います。

何が言いたいかという、人との関係性を結ぶことはとっても大切。ただ、自分というものが土台にないと、健全な関係はもてないとも思うんです。他者との関係性以前に、自分自身との関係性を良好で健康的なものにしていくことも考えてほしい。AIと共存する時代、そんなことも心にとめてもらえればと、今回のインタビューを通して思いました。

02

工芸職人

非合理の塊のようなものが人間。 だからこそ対極にあるAIとも共存するべき

南部鉄器職人 田山貴紘さん

東京で働く会社員が南部鉄器職人になったわけ

岩手県を代表する伝統工芸、南部鉄器。17世紀発祥と言われるが、多くの伝統工芸同様、後継者不足に悩んでいる。そんななか、AIを活用した技術伝承サービスを提供するスタートアップの取組が話題となった。熟練職人の思考をAIが解析し再現するものだ。これにより、熟練職人不在でも、若手が技術を学ぶことが容易になるという。いわばAI師匠の誕生を目指したこの取組に二つ返事で協力したのが、南部鉄器伝統工芸士会会長を父親にもつ田山貴紘さんだ。自身も遅咲きの南部鉄器職人であり、ビジネス面でも業界に新風

を吹き込んできた田山さんが、なぜ「AI×技術伝承」の取組に関心をもったのか。田山さんの足跡を通じて明らかにしたい。



大学院修了後、田山さんは東京の企業で営業職として働いていた。だが、東日本大震災で疲弊した地元を少しでも盛り立てたくなるなど、思うところが重なってUターンを決意。時を同じくして、長年勤めていた老舗の工房を退職し、新しく自宅に工房を構えた父親の下で修業を始めることにした。その際、田山さんが感じていた課題を解決するため、自身に



たやま・たかひろ●1983年岩手県生まれ。埼玉大学大学院修了後、食品会社勤務。2012年に地元に戻り父親の下で南部鉄器職人として修業。翌年タヤマスタジオ株式会社を設立し代表取締役。自社ブランド「kanakeno」の立ち上げ、若手職人育成のための「あかいりんごプロジェクト」など精力的に活動中。(写真提供/田山さん)



課した課題があった。

「一人前になるのに10年かかるとか、全工程を一人のできるようになるまで30年かかるとか言われる世界ですが、今の時代、それは長すぎます。そこで、全工程を早めに経験できる育成の仕組みが必要では、と考えていました。そこで素人の私が実験台となり、真っさらの状態から、どのくらいで、ある程度のもので作ることができるようになるかを検証していくつもりでした」



そして身をもってわかったのが、“きちんとした技術をもつ人の下で、きちんと学ぶことで、技術は早く正しく伝承できる”という確信だ。

「父は50年以上の職人経験を通じて、頭の中で技術を体系的にまとめ、ある程度の学術的な知見ももっていました。発する言葉自体は、理解しにくいことが多いのですが、頭の中では整理されているため、私が『それってこういう理由なの?』などと質問すると、理路整然とした答えが返ってきました。工芸って勘の世界と思われるかもしれませんが、そんなことはありませんでした」

熟練職人の思考を再現するAI師匠の誕生に向けて

この修業体験が、AI師匠をはじめとする人材育成のさまざまな試みにつながるのだが、ほかにも解決したい、業界の構造的な課題があった。例えば販売力、発信力、経営力の弱さだ。そこで顧客との距離を縮めようと、カフェやギャラリーを併設したショップを運営。鉄は錆びるという一見ネガティブな性質を逆手に取った、鉄瓶のブランドも立ち上げた。

「錆止め処理はしているものの、やはり鉄瓶は錆びる道具なんです。でもだからこそ、お湯がまるやかになり、鉄分も補給できる。『育てるのがステータス』と話すお客様もいました。錆びてもメンテナンスすることで、使い続けてもらえるよう、すべての製品に保証をつけるなど、錆びることをも価値としたブランドです」

鉄瓶を多くの人に届けたいという願いと、若い職人の育成も進めたいという課題を同時に解決するプロジェクトも始めた。

「南部鉄器の鉄瓶はどうしても高価格になります。特に、“あられ”と呼ばれる細かい突起や模様付けは高度な技術が必要で熟練者しか扱えません。そこで、あえてその工程を省くことで若手に製作の機会を与え、価格も下げることにしたんです。表面がつるつとしたシンプルな鉄瓶は、むしろ今の住環境や、若い人のセンスに合うかなとも。見た目の印象から、“あかいりんご”と名づけ、

“守”の最終点に早く到達できれば、
その人らしさを発揮する“離”に近づく

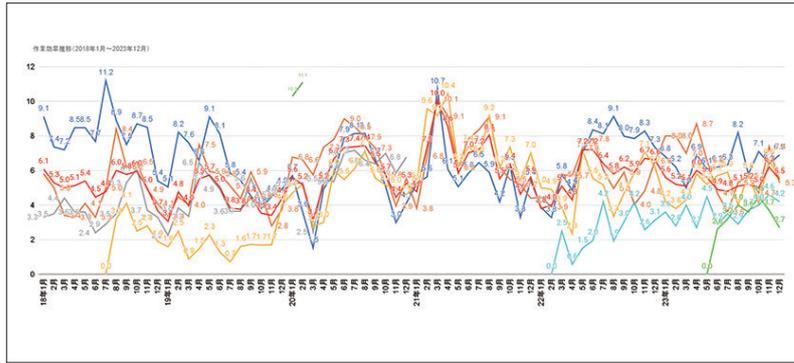


図1

職人育成フローのデータ化

170に細分化した製作工程すべてに標準作業時間を設定するなどして成長度合いを見える化。(提供/田山さん)

人気商品になっています」

また、「工芸は勤の世界ではない」と確信して以降、さまざまなことを数値化してきた。自身の修業体験も参考に、若手職人が、前月、前年と比べて、どれだけ成長しているかを一目瞭然にしたグラフもExcelで作成(図1)。これによって、正しい指導の下、2・3年かければ10年目の職人と同じくらいの働きができることがはっきりしてきた。ここにAI師匠のようなものが加われば、技術の伝承はよりスムーズになると考えるようになった。

「以前、AIをテーマにしたIT企業主催のワークショップに参加したことがあり、こんなことを話した記憶があります。『職人の育成って、どうしても師匠の手を止めるんで、工房全体としての生産性が落ちてしまう。また、師匠の、言葉になっていない部分を汲み取る必要もあり、コミュニケーションロスも多く発生する。そこをAIが代替してくれれば、互いにストレスなく学べるのではないか』って」

そして、この話と関係ないところからAI師匠に直結する話がもち上がった。冒頭で紹介した取組である。

不完全なものに対しても美意識をもつのが人間

話もち込んだのは、AI系スタートアップの株式会社LIGHTz(茨城県つくば市)。アスリートや熟達者の思考を独自開発の技術伝承システムで可視化、再現するなどの事業で実績を積む気鋭のIT企業だ。代表が盛岡出身という縁もあり話が進んだ。

思考を再現する手順として、まず熟練職人である田山さんの父親に対する10時間近くの入念なヒアリングを実施。そこに工学的な裏打ちのため、岩手



りんごのフォルムを模した、かわいらしい南部鉄器の鉄瓶「あかいりんご」。若手職人が製作している。(提供／田山さん)

味がありません。なので私は、製造ではなく、育成のプロセスで使うようにしています。背中で伝える育成手法を否定するわけではありませんが、新しいテクノロジーも活用しながら正しく伝えていくことが、技術が伝承されていく道だと考えています」

では今後、人は、どのようにAIと付き合いがいけばいいのだろうか。

「将棋の世界では、藤井聡太さんがAIを活用しながら、技術を向上させ、それに周囲も引っ張られていると聞きます。AIを活用することで人間の能力が向上しているってすごいこと。一方で、『鉄は錆びる道具』『育てるのがステータス』といった、不完全なものに対する美意識ってAIにわかるのかなと思ったり。本気でバカをやるとか遊ぶとか、合理の裏にある非合理の塊みたいなのが人間じゃないですか。だからこそ対極にあるAIを身近におき、うまく共存することも必要なのではとも思います。守破離[※]という言葉がありますよね。私がAIなども駆使した人材育成に取り組んでいるのは、職人人生のなかで早く『守』の最終点まで到達できれば、その分早く『破』を経て、その人らしさを発揮する『離』の境地に届きやすくなると考えているからでもあるんです」

※守破離：「守」は師から教わった型を忠実に守ること。「破」は自分で模索する段階で、「離」は独自の世界を確立すること

03

自治体

人間の水準がAIによって底上げされ、さらなる高みを目指せる世の中に

横須賀市 経営企画部 デジタル・ガバメント推進室 室長 太田耕平さん（写真右 ※他3名は同僚）

文書業務中心の役所で生成AIは必ず役に立つ

「『ChatGPTを使って何か検討できないか』と上地克明市長から2023年3月に話が出たのが始まりでした」（太田耕平さん）

その日から1カ月未満の4月中旬には全庁での利用をスタートさせ、自治体AI活用の先駆的存在として注目される横須賀市。自ら取組を発信し続け、他自治体との情報共有を目的に、同年8月には『自治体AI活用マガジン』というサイトを開設。生成AI活用について全国の自治体を束ねる存在にもなっている。現在に至るまでスピード感をもって生成AI活用を推進し続ける背景について

取材・文／長島佳子 撮影／安達貴之

横須賀市●神奈川県南東部の三浦半島に位置する人口約37万人の自治体。米軍基地を有する異国情緒ある街並みや、東西を海に挟まれ自然にも恵まれているが、首都圏のなかで早くから人口減少が始まった課題を抱えている。



て太田さんに伺った。

「横須賀は首都圏のなかでも早く少子高齢化による人口減少が進み始め、生産年齢人口の減少という喫緊の課題を抱えています。市の職員数も減っていくなかで行政サービスを維持していくにはテクノロジーの力が不可欠だったのです」

2022年に策定された市の基本構想・基本計画である「YOKOSUKAビジョン2030」では、急激に変化する時代の様相を悲観せずに受け入れて立ち向かう「変化を力に進むまち。横須賀市」を未来像として掲げている。AIも受け入れて力にすべき変化の一つなのだ。ChatGPTが出現したとき、既存のインターネットサービスと比較して浸透スピードが圧倒的に速いことから、近い将来生成AIがITインフラの中心になると太田さんたちは考えていた。

役所の業務には文書作成が膨大にある。同市が1年間で作成する公文書数は実に9万件以上。そこに職員の時間と労力が費やされている。

「文書を作成してくれる生成AIが役所で役に立たないはずがないのです。基本的なルールと使い方さえわかれば有効なツールになると確信していました」

まずは全職員が使い慣れているビジネスチャットツールにChatGPTの機能を組み込むことで、普段からチャットを使う感覚で利用してもらい始めた。情報漏洩についてのルールや「最後の判断は人間がする」ことは徹底した。

生成AIを職員に活用してもらうための普及と啓発活動にもすぐに取り組んだ。『チャットGPT通信』という利用促進ガイドを庁内報として定期刊行をスタート。識者による研修のほか、導入から半年後に「ChatGPT活用コンテスト」を実施。庁内での新たな活用事例の発掘と職員のモチベーションアップにもつながった。

「最初は検索に使う人が多く、“生成”が活かされていませんでしたが、啓発活動を進めた結果、導入から半年後には検索や調査よりも文書案の作成など本来の目的に利用する人が右肩上がりに増えました」

また、先陣を切った立場として日本の役に立ちたいという考えから、他自治体向けの問い合わせ対応botを開発。同市に寄せられる自治体からの問い合わせ

生み出された時間で、血の通った
福祉サービスを充実させていきたい

をデータベース化し、チャット形式でAIが回答する仕組みを開発・運用している。

市民の相談、認知症予防…行政における無限の可能性

横須賀市では市民サービスにも生成AIの活用を始めている。その一つが「市長アバター」だ。米軍基地を有し、市内にも外国人居住者が多い特色をもつ同市。外国人向けに市長の定例記者会見を英語で発信するために、日本語での会見動画を基に、英訳した文章が入力された市長アバターの動画を公開している。

また、音声対話型AIアバターによる観光案内相談「えーあいそーだんいん」の実証実験を行っている。メタバース空間で人気3Dアバターが対話しながら横須賀について案内してくれる。将来的に24時間いつでも相談、行政情報の発信ができる仕組みを目指している。

今年の8月から開発に取り組んでいるのは、産官学連携による認知症予防サービスだ。認知症予防には「会話」が重要な役割を果たすことから、一人暮らしの高齢者でも日常的に会話ができるよう、高度な音声会話生成AI技術



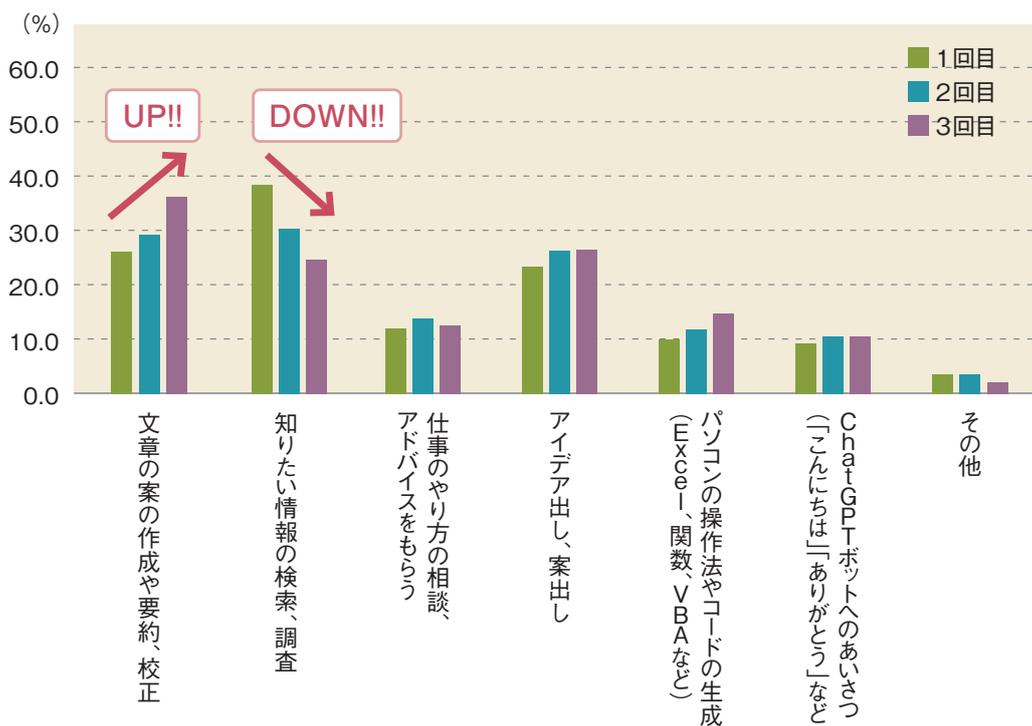
上地市長がネイティブのように語っている「市長アバター」による英語での記者会見。市のYouTubeで視聴できる。



今春に実証実験が行われたAIアバターがメタバースの横須賀を案内する「えーあいそーだんいん」。(まめひなた©もち山金魚)

ChatGPTを利用して行ったことは何ですか

ChatGPTの全庁導入から半年間で3回行ったアンケートで、「文章の案の作成や要約、校正」が狙い通りに右肩上がりに。



を導入し、自然な会話で高齢者が思い出話もできる仕組みを開発中だ。

生成AI活用により生み出される時間の活用法を尋ねると、間髪入れずに「福祉」と答えが返ってきた。

「市民の方々が行政サービスに頼るのは困ったときです。そのときにこそ我々人間の力を使っていくべきです」

そう語る太田さんのAI観とは。

「生成AIを導入して、庁内で誰がより使っているか調べたところ、想定内だった企画系の職種はもちろん、消防など通常はパソコンを使わない職種の利用も多かったのです。普段は命を守る訓練をしている人々が部署異動でデスクワークになると、急に文章作成や法律の勉強を余儀なくされます。デジタルが苦手な人ほど効果を発揮するのがAIなのではないかと感じています。つまり、ある一定の基準まで誰をも引き上げてくれるツール。そのことで組織の土台の力が上がって活性化される。でも、サボっていたら成長できない。AIに頼りきるのではなく自分からもAIへの働きかけを工夫することで、共存しながら更なる高みを目指せるツールではないかと。AIと人間は、ドラえもんとのび太君の関係のようなものだと捉えています」

04

食品メーカー

AIは人間のポテンシャルを 引き出してくれるツール

有限会社仲松ミート 執行役員 総務・経理統括部長 仲本和美さん

街の小さなお肉屋さんでAIで業務効率改革

那覇市内から車で約1時間の場所に位置するうるま市。従業員数27名の仲松ミートは、この地で肉の冷凍食品を中心に製造販売を行う小さな会社。取引先は県内のスーパー、飲食店、病院、社員食堂など多岐にわたり、地元で愛されているお肉屋さんだ。

主力商品は「ハムチーズサンド」などの揚げ物。手作りのフライ商品を冷凍

取材・文／堀水潤一 写真／平山 諭

仲松ミート●1982年創業。沖縄県うるま市所在。冷凍食肉加工品を、沖縄県内の飲食店・病院・老人ホーム・社員食堂などに販売。OEMや自社オリジナル製品の開発から製造まで手がけている。



し、翌日箱詰めして出荷される。作業をする従業員の女性がそばにあるAIアシスタントに「アレクサ、ハムチーズサンド5枚入り50ケース記録して」と声をかける。アレクサは「はい、メモに保存しました」と返答。これにより、今まで手で入力していた生産管理が音声により自動で行えることになった。

仲松ミートがAIを導入したきっかけは、内閣府の『令和2年度沖縄型産業中核人材育成事業』の「製造業(食品製造業)に伴走支援できるIoT専門人材育成プログラム」のモデル企業に手を挙げたことに始まる。同社の課題に対してプログラムに参加した5つのグループがIoT導入計画を策定。それらの提案のなかで、AIアシスタントによる生産管理体制を構築する案を採用したのだ。

提案のなかには壮大なIoTシステム導入の案もあった。しかし、工場の主力メンバーである高齢者や障がいのある従業員が、キーボード入力する必要がなく声のみで簡単に指示が行え、導入費用も安価。将来の切り替えも簡単に行える点が同社に合っていると判断しての採用だった。実際に導入したことで、社内の業務効率化や新規事業開発などの改革を推し進めている。

この改革を担っているのが執行役員の仲本和美さんだ。以前は書店の経営をしていた仲本さんが、10年前に姉夫婦が経営する仲松ミートに入社。それまでの同社は、受注した分だけ作り、繁忙期に多数の受注が入れば従業員の残業や休日出勤に頼るといった操業方法だった。

「家族経営の延長で製造管理もできていなかったんです。月にどれだけ作ってどれだけ売れているのかも把握できていなかった。だから当初は業務効率



AIアシスタントと会話方式で生産情報を記録する従業員たち。AI導入で働く意識が変わってきたようだ。

化のためには在庫管理が必要で、モデル企業に手を挙げたのも、在庫管理の仕組みを提案してほしい気持ちからでした」(仲本さん)

しかし、IoT専門人材育成プログラムの参加者たちからヒアリングを受けるうちに、必要なのは在庫管理よりも、自分たちの生産能力を正確に知ることだと気づいた。生産能力がわかれば、どれだけ受注できるか、そのための仕入も計画的に行うことができる。採用した提案は、AIアシスタントと業務改善アプリを使って、製造した商品の名前と個数を音声で入力すると、データがパソコンへ蓄積されていくというシンプルなシステムだった。スマホでAIアシスタントに何かをお願いするのと同じイメージだ。

70歳を超えるベテラン従業員は、AI導入によって仕事に対する意識が変わったと語る。

「以前はただ作るだけで先が見えませんでした。今はいつまでに何をどれくらいという目標が明確に設定されています。目標がわかると、それをクリアするためにはどう工夫すればいいか考えるようになり、やりがいにも繋がっています」(社歴18年目の宮里清子さん)

「AIが意識改革につながり、従業員たちのポテンシャルが上がったと感じています」(仲本さん)

おいしいものを作って喜ばれる新規事業を拡大中

AIを導入して2年。生み出された時間で仲本さんは新規事業を次々と立ち上げている。その一つがレトルト食品だ。IoT専門人材育成プログラムの検討時期はコロナ禍で行動制限がかかっていたことで、主力商品の一角を担っていたバーベキュー用の肉などの売上が激減していた。そのときに巣ごもり需要を見込んで新規開発したレトルト食品が好評を博した。

新規事業について発信すると多方面から「こんなものを作りたい」という相

AIが次のチャレンジに向けて
背中を押してくれた



AI導入後に仲本さんが開発した新商品の数々。主力の冷凍食品とは異なる分野に事業が広がっている。

談が舞い込んでくるようになった。農家からの相談では一緒にジャムを作った。レストランからメニューをレトルトにして販売したいと申し出が来るなど、協働の相談が相次いでいる。

仲松ミートには「無駄なものは入れず、材料は無駄にしない」という社長のこだわりがある。規格外商品や廃棄される部位の有効利用法を考えていた仲本さんは、牛の肺やまぐろの皮・血合いなどを利用したドッグフードを思いつき商品化している。

「人間にも犬にも喜ばれるおいしいものを作り続ける。それが我が社が目指す姿で、AI導入で業務効率できたからこそ多様なことにチャレンジできています」
(仲本さん)

面白いことが好きで、やりたいことがまだたくさんあるという仲本さん。新規事業の作業工程を整理していけば、障がいのある従業員ができることも増えると考え、次は作業工程もAIの力で可視化していこうとしている。

「AIの導入は、新しいことにトライする架け橋になってくれました。でもAIを入れればなんとかなるのではなく、どう使うかを人間がちゃんと考えないとうまく動きだしません。沖縄には『なんくるないさ』という言葉があります。『なんとかなる』と勘違いされていますが、本来は頭に『まくとうそーけー』がついて『正しいことをちゃんとやっていけばなるようになる』という意味。人のAIとの付き合い方も同じことだと思います」

05

野球部監督

AIは、人の気持ちまでは察せない。 だから最後は、選手の直観に委ねた

品川翔英中学校・高校 教諭・野球部監督 石田 寛さん

AI提案の練習案を参考に練習環境のハンデを克服

2023年7月、練習環境もままならない創部2年目の野球部が公式戦初勝利を掴んだ。白星に一役買ったのがChatGPTというから驚きだ。仕掛け人は、品川翔英高校(東京都・私立)の情報科主任で、野球部監督を務める石田寛先生だ。民間企業で働いていたが、少年野球チームの指導を手伝ううち、硬式野球部の監督をしたいという夢が膨らみ、転職を決意。定時制高校などに勤めたのち、共学化したばかりで野球部のない品川翔英高校が教員を募集していることを知り、応募した。

取材・文／堀水潤一 写真／平山 諭

いしだ・ひろし●1987年生まれ。大学で教員免許(商業科)を取得するも民間企業に就職。その後通信教育課程で情報科の免許を取得。定時制高校などを経て2021年に品川翔英高校赴任。現在、野球部監督、情報科主任。



「実績のない人間が、いきなり監督になるのは難しいため、創部から関わろうと思ったんです。面接官には『校舎も建て替え中だし、野球ができる環境もないから創部は無理』と言われましたが、最終面接でも、野球部をつくる話ばかりしていました」

晴れて採用された2021年4月、新入生を熱心にスカウトする石田先生の下に11人の一年生が集まり、野球同好会が発足。翌年、念願叶って正式な部へと昇格した。

「けれど、創部初年度の夏の初戦は0対20と大敗してしまいました。それでも懸命に成長しようとする生徒を見て、自分も何か挑戦しなければという気持ちになりました。そこで授業でも使っていたChatGPTを活用することにしました。喫緊の課題は、限られたスペースで、いかに効率的に練習するか。工夫を尋ねたところ、驚くほど具体的な案が挙がってきました」

例えば、「グラウンド整備中のためノックをするスペースがないなか、フライを捕球する有効な練習方法はないですか?」という質問を端に、校舎4階から落としたボールを捕球するという練習メニューが生まれた。

マウンドがない代わりに、跳び箱の最上段とベニア板で傾斜を作ったり(下写真)、バドミントンの羽をボールに見立ててバッティングをしたりなど、出てくるアイデアは無限。

学校の施設・設備や部員数、練習時間などを詳しく入力したうえで、その



跳び箱の最上段とベニア板で作った“マウンド”で投球練習。(写真提供/石田先生)

日の効率的な練習メニューを考えてほしいと質問すると、部員をいくつかのグループに分けたうえで、ウォーミングアップから実践練習までローテーションで回すメニューも提案してくれる(43ページ画像)。

そうした練習も功を奏し、冒頭で紹介した初勝利につながったのだ。

AIの提案を参考にしつつ最後は選手の直観に委ねる

ところが、翌2024年の夏の大会。たまたま前年と同じ組み合わせとなった相手に、今度はコールド負けを喫してしまった。

「相手の先発は、去年も対戦した素晴らしい投手で、彼さえ降ろせば勝負になると考えていました。ChatGPTからも、『最初に球数を投げさせて後半勝負』というアドバイスがあり、選手ともそのように話していました。ところが打者が一巡したところで『結構、打てるぞ』という声上がり、初球から積極的に打ちにいくよう作戦を変えたんです」

データよりも、生徒の感覚を信じたわけだ。結果は裏目に出たが、3年生にとって最後の大会。悔いなく戦えたことは良かったと感じている。

もう一点、誤算だったのは、昨年度はベンチにいたためノーマークだった4番打者に、初回ツーランを打たれたこと。AIは過去のデータを基に分析するわけで、データ自体がなければ予測のしようがない。そうした限界を改めて知ることになった。

ChatGPTの活用が話題となり、外部から否定的な意見も聞こえてきたが、多くは監督が考えるべきことをAIに丸投げしているという誤解に基づくものだ。だが、ChatGPTの提案をそのまま活用することはない。

「提示された練習メニューは、あくまでたたき台であり、最終的には、知識や経験を基に自分が決めますし、生徒から『こういうことをしたい』と言われたら臨機応変に対応します。それに、メニュー作りでは知人の意見や書籍、

私がしたかったのは、人間形成であり、
人の成長に立ち会うこと

YouTubeなども参考にしています。そういう意味ではAIはあくまでツールの一つです」

石田先生は、野球部の指導以外でも、生成AIを取り入れている。

「中学生の総合的な学習の時間では、画像生成AIを使って紙芝居を作るなどの取組も学年全体でしています。頭で思い描いたイメージと実際のアウトプットが一致するとは限りません。こちらの意図を明確に伝える言語能力のほか、さまざまな力の育成につながると考えています」

同校は、校長自らAIの活用を推奨しており、石田先生は、文書の下書きやタスク管理にも使っている。

「ChatGPTを活用することで浮いた時間を、生徒指導に使うことができ非常に助かっています」

AIは、人と一緒に歩いていくパートナー。AIの力をうまく引き出し、掛け算の関係になりたいと話す。一方で、今のAIにできないことは、相手の気持ちを察することだと石田先生。

「生徒の顔を見れば『今日は元気がないな』『調子良さそうだな』と気づきますし、何気ない会話から、何を考え、何を悩んでいるか気づくこともあります。だからこそ、一人ひとりとの会話を大切に、日々、笑ったり、励ましたりしたいです。私が転職してまでしたかったのは、人間形成であり、人の成長に立ち会うことですから」

ChatGPT

高校野球の監督をしています。現在の日程は2024/07/31です。9月1日までに迎った秋大会に向けてチームを強化しているところです。チームのウェークポイントは投手陣のコントロールです。明日はオープンでしゅつかと体を動かしたいです。練習時間は13時15分からスタート最初の15分は投内清掃をやらせてから13時30分から15時までは投内練習。15時から17時までがグラウンドでピッチング練習。17時から18時まではピッチング練習。ピッチング系の練習ができればと思います。投手陣は7名内野手も各ポジションの人数制限でそれぞれがうまく回るように練習メニューを考えてください。グラウンド以外にもトシ室は常に投入、中庭でもカラーボールの練習・ラダー・メダシンボールの練習ができます。

● メモリを更新しました
明日の練習メニューを以下のように計画しました。各セッションで投手、内野手、外野手が効果的に練習できるように配慮しています。

練習スケジュール
13:15 - 13:30 投内清掃
・ チーム全体で投内の清掃を行います。

ChatGPT

投手陣 (7名)

- 13:30 - 14:00 ラダーレーニング
 - 場所: 中庭
 - 内容: 敏捷性と足の速さを鍛えるための
- 14:00 - 15:00 ターゲット投球ドリル
 - 場所: 中庭
 - 内容: ターゲットに向かって投球し、コントロールを鍛える

内野手 (9名)

- 13:30 - 14:00 フットワークドリル
 - 場所: トシ室または中庭
 - 内容: ラダードリルやメダシンボールを使ったフットワークの練習
- 14:00 - 15:00 キャッチングとスローイング練習

ChatGPT

- 16:30 - 17:00 実戦形式の内野守備練習
 - 内容: 実際のプレーを想定した守備練習

外野手 (4名)

- 15:00 - 15:30 キャッチボールとスローイング練習
 - 内容: 正確なスローイングの練習
- 15:30 - 16:30 フライ捕り練習
 - 内容: フライの捕球とスローイングの一連動作を確認
- 16:30 - 17:00 実戦形式の外野守備練習
 - 内容: 実際のプレーを想定した守備練習

注意点

- 水分補給: 気温の中での練習となるため、こまめな水分補給を徹底します。
- 休憩の確保: 選手の体調管理を最優先にし、必要に応じて適宜休憩を取るようにします。

これにより、投手のコントロール向上だけでなく、内野手と外野手の基礎技術と実戦力を高めることが

ChatGPTが提案した練習メニュー案。実際には、この倍近くの回答が続く。(提供/石田先生)